

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：32704

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720159

研究課題名(和文) 20世紀フランス文学・文学理論における「類似性」の脱構築

研究課題名(英文) The Deconstruction of the "resemblance" in the twentieth-century French literature and literary theory

研究代表者

郷原 佳以 (Gohara, Kai)

関東学院大学・文学部・准教授

研究者番号：90529687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀フランスにおける文学作品およびレトリック再興の流れにおいて従来とは異なる新たな「類似性」が提起されたことを証し立て、その意義を究明する、という目的に沿って、主として以下の研究を行った。

°(1) モーリス・ブランショの小説における「ヴェロニカの聖骸布」神話の読み換えを分析した。またブランショの「イメージ」概念の宮川淳による受容を分析すると共に、サルトルとブランショのジャコモッティ批評を検討した。(2) 1960-70年代の「隠喩」論争を整理すると共に、その現代における帰結といえるブリュノ・クレマンの思想を分析した。(3) ジャック・デリダのミメシス論である「散種」および「蚕」を翻訳し分析した。

研究成果の概要(英文)：In the purpose of demonstrating that a new "resemblance" appeared in the literature and the movement of the rhetoric revival in the 20th century France and investigating the signification of it, I carried out theses researches: (1) I analyzed the description considered as a version of the myth of "Veil of Veronica" in a novel of Maurice Blanchot. I also analyzed the reception of the concept of "image" of Blanchot by Atsushi Miyakawa. And in referring to Miyakawa, I investigated the critique of Giacometti by Sartre and Blanchot. (2) Putting the dispute over the "metaphor" in the 20th century France in order, I presented and analyzed the work of Bruno Clement which may be the actual response to that dispute.

(3) I translated and analyzed the "La Dissemination" in La Dissemination, "Un ver a soie" ("Silkworm of one's own"), texts on mimesis, of Jacques Derrida.

研究分野：フランス文学

キーワード：モーリス・ブランショ ジャック・デリダ ブリュノ・クレマン フィギュール

1. 研究開始当初の背景

モーリス・ブランショは「イメージ」をめぐる考察において、現実を模倣再現するという従来の表象概念を大きく逸脱する「イメージ」概念を打ち出した。しかし、「類似」概念を棄てたわけではなく、それどころか、「イメージ」を「自己との類似」として定義した。「類似」概念の同様の読み替えは、ブランショだけでなく、アポリネール、バタイユ、クロソウスキー等々、20世紀フランスの小説や思想に広く見出すことができる。

また、1960 - 70年代にフランスで興ったレトリック再興の流れのなかでミシェル・ドゥギーやジェラルド・ジュネットなどが行った「隠喩」をめぐる論争のうちにも、同様の「類似」概念の再考を認めることができる。

よって、20世紀フランスにおいては、文学作品と文学理論の双方において、「類似性」の再考と脱構築が図られたと言える。

本研究では、研究代表者自身のブランショ研究を踏まえて導かれた以上のような独自の問題関心をもとに、関連文献に詳細な分析を加えると共に、その全体像を浮かび上がらせる必要があった。

2. 研究の目的

(1) 20世紀フランスにおける文学と文学理論(とりわけレトリック)の双方において「類似」概念の脱構築が行われてきたことを具体的に提示すること。

(2) 従来、現代文学・芸術が「類似」概念の脱構築について検討することにより、文学をリアリズム/フォルマリズムの二者択一から解放すること。

3. 研究の方法

(1) ブランショを始めとした20世紀フランス文学における新たな「類似」の諸相を具体的なテキスト分析によって明らかにする。

(2) ブランショやデリダなどの思想家における「イメージ(像)」論や「ミメーシス(模倣)」論としての「類似」概念の再考を具体的なテキスト分析によって明らかにする。

(3) 1960 - 70年代フランスにおけるレトリック論争、とりわけ「隠喩」をめぐる論争の争点を整理すると共に、その延長線上で思考している現代の文学研究者ブリュノ・クレマン(パリ第8大学教授)の思想を提示紹介し、分析する。

4. 研究成果

(1) モーリス・ブランショの小説『死の宣告』において「ヴェロニカの聖骸布」神話の読み換えと考えられる描写を分析した(『別冊水声通信 セクシュアリティ』所収論文「ヴェロニカ、あるいはファリック・シスターの増殖 ブランショとセクシュアリティ

イ)。

また、ブランショにおける特異な「イメージ」概念が美術批評か、宮川淳によりいかに受容されたかを提示し、分析した(*Cahier de l'Herne* 所収論文《Atsushi Miyakawa et Maurice Blanchot - fascination de l' image》)。

さらに、宮川のイメージ論を参照しつつ、サルトルとブランショのジャコメッティ批評を比較検討し、両者の「イメージ」概念の共通性と差異を抽出した(「ジャコメッティを見るサルトルとブランショ 距離について」)。

(2) 1960 - 70年代フランスにおけるレトリック再興、とりわけミシェル・ドゥギーやジェラルド・ジュネットらによる「隠喩」論争を整理すると共に、その現代における帰結ともいえるパリ第8大学教授の文学研究者、ブリュノ・クレマン(研究代表者が招聘した)の思想を提示し、分析した(「文彩」の学から「比喻形象」の学へ ミシェル・ドゥギーとブリュノ・クレマン)。

また、関東学院大学で開催したクレマンの講演「もうひとつの声の必要性 モーリス・ブランショとプロソポペイア」を翻訳紹介すると共に(『関東学院大学人文科学研究所報』第37号、2014年3月)クレマンの最新著『垂直の声』(2013)を翻訳した(水声社より刊行予定)。プロソポペイア(活喩法)とは、不在の者や死者に声を与えて語らせるというレトリックの一技法であり、『垂直の声』はこの技法を軸に諸テキストを分析する書物である。プロソポペイアを文学テキストの根本に見出すクレマンの理論は、創造の源としての「ミメーシス」概念の再考となっている。

よって、さらに、これらのクレマンの理論を活用し、ブランショの文学理論および文学作品における「声」の問題を検討し、ブランショにおいて「声」が「エクリチュール(書かれたもの)」の対立物ではなく、むしろ、誰のものでもないざわめきとして文学テキストに不可欠のものであることを示した(「セイレーンたちの歌と「語り」の声」ブランショ、カフカ、三人称)。

(3) ジャック・デリダのミメーシス論の原点といえる『散種』(共訳、法政大学出版、2013年)所収「散種」、および、やはりミメーシス論であるエレーヌ・シクスー/ジャック・デリダ『ヴェール』(単独訳、みすず書房、2014年)所収「蚕」を翻訳し、分析を加えた(「散種」と枠(cadre)の問題・序説、『ヴェール』所収「訳者解説 「蚕」、あるいは、脱構築の告白」)。

そのうえで、「蚕」における蚕のように、デリダの自伝的著作に現れる動物たちの形象に注目し、主として『動物を追う、ゆえに(私は)動物である』を対象として文学的なテキスト読解を行い、動物たちの形象の意義

を明らかにした(「animot をめぐって、あるいは、デリダにおける動物論の脱構築はなぜ必然的か」、「L'enfant que donc je suis、あるいは、猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

郷原佳以「L'enfant que donc je suis、あるいは、猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」『現代思想 総特集デリダ』第43巻、2015年2月臨時増刊号、76 - 100頁。

郷原佳以「「物語」と第三の空席 村上春樹とモーリス・ブランショ」『早稲田文学』第6号、2013年9月、478 - 495頁。

[学会発表](計6件)

郷原佳以「ジャコメッティを見るサルトルとブランショ 距離について」、日仏文化講座シンポジウム「美術を哲学する 現代フランス思想とイメージ」2015年1月31日、日仏会館ホール。

郷原佳以「L'enfant que donc je suis、あるいは、猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」、ジャック・デリダ没後10年シンポジウム、2014年11月22日、早稲田大学小野記念講堂。

郷原佳以「セイレーンたちの歌と「語り」の声 ブランショ、カフカ、三人称」、シンポジウム「声と文学」第1回「声の不在と現前」、2014年9月27日、東京大学文学部1号館315教室。

郷原佳以「animot をめぐって、あるいは、デリダにおける動物論の脱構築はなぜ必然的か」、日本フランス語フランス文学会2014年度春季大会ワークショップ「人間と動物」、2014年5月25日、お茶の水女子大学共通講義棟105教室。

郷原佳以「「散種」と枠(cadre)の問題・序説」、第2回脱構築研究会ワークショップ「ジャック・デリダ『散種』」、2013年12月21日、早稲田大学文学部キャンパス36号館581教室。

郷原佳以「「文彩」の学から「比喻形象」の学へ ミシェル・ドゥギーとブリュノ・クレマン」、日本フランス語フランス文学会2013年度春季大会ワークショップ「来たるべき修辞学 文学と哲学のあいだで」2013年6月2日、国際基督教大学252教室。

[図書](計6件)

郷原佳以、他『インデックスとイリュウ

ジョン 文学と声の現象学』平凡社、2015年、刊行決定。

郷原佳以、他『マルグリット・デュラス 生誕100年 愛と狂気の作家』河出書房新社、2014年、239頁(143 - 153頁)。

Kai Gohara et al., *Cahier de l'Herne Blanchot*, Éditions de l'Herne, 2014, 399p (p. 370-376).

郷原佳以、他『別冊水声通信 バタイユとその友たち』水声社、2014年、422頁(125 - 139頁)。

エレヌ・シクスー/ジャック・デリダ、『ヴェール』郷原佳以訳・解説『ヴェール』みすず書房、2014年、201頁(163 - 201頁)。

郷原佳以、他『別冊水声通信 セクシュアリテイ』水声社、2012年、326頁(259 - 283頁)。

[産業財産権]
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
<http://www.geocities.jp/detruireditelle/kai.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

郷原 佳以 (Kai Gohara)
関東学院大学・文学部・准教授
研究者番号：90529687

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：